

台湾における研究体制の整備と コア・ジャーナル

佐藤 幸人

台湾においてコア・ジャーナルと呼べる学術誌は何か。以下では台湾における過去十年あまりの研究体制の整備を通して考えてみたい。

●等級制度とTSSCI

台湾では一九九〇年代末から、研究体制にかかわる三つの制度の整備が進められてきた。三つの制度とは学術誌の等級を定めること、学術誌のデータベースを構築すること、研究者の評価を研究成果によって客観的に行うことである。それぞれの制度の整備は一定程度独立していたが、同時に半ば意図的な、半ば意図せざる連動をもなっていた。

学術誌の等級（「期刊排序」）を定める調査は一九九八年に第一回が行われ、その後、現在まで二回行われている。等級の判定は引用件数などの客観的な指標と、研究者に対するアンケート調査や専門家による審議を総合して行っている。

データベース（「台湾社会科学引文索引資料庫」, Taiwan Social Sciences Citation Index^①以下、TSSCI）は一九九八年から開放され、その後毎年基準にしたがって改訂されている。TSSCIに収録されるためには、定期的な刊行といった形式的な基準のほか、学術的なクオリティも満たさなければならぬ。表1に社会学の学術誌について等級制度とTSSCIを統合的に示した。

同じく二〇〇〇年前後から、研究者の採用や昇進および研究費にかかわる審査において、客観的な基準をとり入れようという動きが活発になっていった。なかでも重視されるようになったのが、学術誌に掲載された論文の本数である。

とりわけTSSCI (Social Sciences Citation Index) に収められている英文の学術誌に論文が掲載されれば、高い評価が得られるようになった。このことに関しては既に書いたものがあるので、詳しくはそちらを参照されたい（「台北便り」<http://jats.gr.jp/archives/sato.html#001>および『知』の共有促進制度を」<http://www.asahi.com/international/aan/hatsu/hatsu040303b.html>）。また、このような制度の変化によって日本留学組がいか

に不利な状況に陥ったか

表1 社会学の学術誌（2006～2007年の調査）

	TSSCIに収められている学術誌	TSSCIに収められていない学術誌
第1等級	台湾社会学、台湾社会学刊	
第2等級	台湾社会研究季刊 [*] 、台大社会工作学刊、社会政策與社会工作学刊、人文及社会科学集刊 [*] 、人口学刊 [*] 、中華心理衛生学刊 [*]	調査研究：方法與応用
第3等級	政治與社会哲学評論 [*] 、台湾教育社会学研究 [*]	台湾社会福利学刊、台湾社会工作学刊、国立政治大学社会学報、東吳社会工作学報、女学学誌：婦女與性別研究 ^{**}
第4等級		教育與社会研究、東吳社会学報、思與言：人文與社会科学雑誌、資訊社会研究

(出所) TSSCIウェブサイト (<http://db1n.sinica.edu.tw/textdb/tssci/searchindex.php>) および行政院国家科学委員会ウェブサイト (<http://www.nsc.gov.tw/hum/p.asp?ctNode=1144&CtUnit=813&BaseDSD=7>) より作成。

(注) メディア研究は除いている。
^{*} TSSCIでは社会学以外の分野に分類されている。
^{**} THCIに収録されている。
 なお、現在TSSCIに収められている『文化研究』は、2005年刊行のため、調査の対象外になっている。

は、本誌第一七九号（二〇一〇年七月）の劉仁傑「台湾における英文ジャーナル論文中心主義の興隆とその影響—「日本留学組」の苦悩—」を参照されたい。
 このような評価制度の下、中国語の学術誌の「格付け」も重要性を増すことになった。ところが、その際に奇妙なねじれが生まれた。等級制度があるにもかかわらず、実際にはTSSCIに収録されているか否かが、デファクトの基準として普及してしまっただけである。恐らく原因は複合的である。第一に、TSSCI自身が当初、

学術誌の格付けも目的としていたことである。第二に、TSSCIの方が幾つかの理由からわかりやすかったことである。まず等級制度自体が必ずしも広く知られていなかった。また、TSSCIか否かという基準は単純明快である。そして、英文論文の基準であるSSCIと対応している。

しかし、このねじれは弊害を生み出している。TSSCIが二重の目的を持ったために、データベースとしては収録誌が少なく、学術誌の格付けとしては十分に適切かつ慎重な審査に基づいていないという中途半端なものになってしまった。しかも、TSSCIか否かという単純なわかりやすさは乱暴な二分化と裏腹となつてい

る。このような弊害を是正するため、科学技術政策を担当する行政院国家科学委員会が中心となつて、データベースと等級制度を明確に分ける改革を進めている。すなわち、将来的にはTSSCIと人文科学のTHCI（台湾人文学引文索引）、「Taiwan Humanities Citation Index」を統合すること

もに、基準を緩めて収録誌を大幅に増やし、データベースとしての機能を強化する。同時に直接的な格付けの機能は弱める。一方、等級制度の整備と普及を進める。

●台湾のコア・ジャーナル

前述のような事情から、今、台湾の社会科学の研究者にコア・ジャーナルは何かと尋ねれば、TSSCIに収められている学術誌をあげる可能性は高い。しかし、台湾の学術誌のクオリティや影響力をより正確に示すのは等級制度である。等級制度の上位の学術誌はほとんどTSSCIに含まれているとはいえず、表1が示すように、若干のずれがあることには注意しなければならない。例えば等級制度では第二級の『調査研究・方法と応用』はTSSCIには含まれていないが、第三級の学術誌も二誌、TSSCIには含まれている。

等級制度における各分野のトップ二誌は、社会学では『台湾社会学』と『台湾社会学刊』、経済学では『経済論文』と『経済論文叢刊』、政治学では『台湾政治学刊』と『東吳政治学報』である。当然、TSSCIにも収められている。これらが台湾のコア・ジャーナル中のコアといえよう。それぞれの分野でどのようなトピックを議論しているのか、三分野から一誌ず

つ、最新号の目次を表2に示した。台湾にかぎったことではないが、社会学の各論文は台湾社会に對する強い関心に基づいている。

一方、経済学は一般性への志向が強く、その分、台湾社会への関心は弱い。数人の社会学者によれば、彼らは想定する読者に応じて使用する言語を使い分けられているという。彼らの書く中国語の論文は台湾の人々あるいは中国語を使う人々との対話を意図しているもので、台湾社会や中華圏への関心が特に顕著に現れる。それに対して、経済学者は英文での発表を強く志向し、中国語の論文でも一般的な問題を論ずる傾向がある。政治学のポジションは中間である。

また、『台湾政治学刊』の最新号にたまたま集中したきらいはあるが、中国が社会学や政治学では重要な研究対象となつていことがわかる。中国および中国との関係をどのように理解するかは、台湾自身への関心の延長線上にある。いずれも厳しい審査を通

過した論文である。台湾の社会学の動向を知るためには、まずこの六誌からアプローチすることが適当だろう。

(さとう ゆきひと/アジア経済研究所 企業・産業研究グループ)

表2 コア・ジャーナル最新号の論文

『台湾社会学』第21期 (2011年6月)
消えた農民・漁民——台湾における初期環境保護運動再論 永遠の異邦人か——市民身分の格差と中国「農民工」階級 わたしは落ちこぼれのフェミニストかもしれない——フェミニズムのアイデンティティと実践の語りの構築 「夫の首枷」から「国家の首枷」へ——構造的に交錯する苦境下において暴行を受けるベトナムからの婚姻移民女性
『経済論文』第39巻第3期 (2011年9月)
輸入競争、一括販売、研究開発 台湾の非線形利率法則再論 ウェブレット変換を用いたアメリカのマクロ経済指標とダウ工業指数の関係の分析 (英文) 対外投資をしている企業は常に生産性が高いか——技術移転コストの役割
『台湾政治学刊』第15巻第2期 (2011年11月)
国家の野生生物保護体制、社会経済の変動及び原住民の狩猟——タロコ族における制度の相互作用の実証分析 中国大陸から台湾への留学生の政治的態度と台湾の主権を受容するレベル 中国の社会組織のガバナンス構造とドメイン分析——環境保護とエイズのNGOの比較 中国大陸の基層における民主と社会保障制度の発展 中国東南部における環境被害と社会の脆弱性——適応型権威主義の事例か (英文)

(出所) 各誌の目次を和訳。